

平成 27 年度 第 3 回人権読本ぬくもり第 3 版検討委員会 議事録

- 1 開催日時 平成 28 年 2 月 10 日(水) 10:00～11:10
- 2 開催場所 教育委員会会議室
- 3 出席者 (23 名)
- 4 傍聴人 なし
- 5 議事

【委員長】

小学校版「ぬくもり」の L G B T に関する題材を中学校で使っている例があるようだ。所定の場所以外でも広く使われている。

【委員】

「てをあらおう」について。

解説で手を洗えない状況の子どもがいることを紹介するとあるが、具体的にはどのような文章になるのか。

【事務局】

世界には手を洗えないことで病気になる子どもがいることと、手洗いは健康にとって重要であることを説明する。

【委員】

世界を見渡すとそれぞれの国の事情で手を洗いたくても洗えない子ども達がいるという説明を入れることで、人権問題に繋がるということか。

【委員長】

健康が人権問題だということか。

【事務局】

そうだ。

【委員長】

なぜ今、子ども達が人権問題として手を洗うのかの説明が必要だ。

【委員】

「ぬくもり」の中で人権問題として扱うことを現場に浸透させるには、執筆の意図をしっかりと説明することが必要だ。

【委員長】

他国や他地域で人権が侵害されている事実があるが、自分達だけは問題がないという話では子どもは納得いかないのではないか。

自分達が手を洗うこと自体が、自分たちの人権を守ることに繋がるという理解に繋がるような解説が必要だ。

【委員】

自分達の環境が恵まれているという気付きは、それが当たり前として続いていくという理解には繋がるが、手を洗う動機付けになるだろうか。

【委員長】

他人の不幸を離れた場所から見ることは避けなければならない。自分の問題として取り組めるような説明が必要だ

【委員】

授業者が、自分達は良かった、洗えない人はかわいそうという視点になってしまう危険性もあるので、解説が重要。

【委員長】

異文化理解の題材であれば、生活様式の違いも1つのライフスタイルと捉えるが、この題材では手を洗わないことを肯定的に捉えていない。同じような構造だが使い方が異なる。

【委員】

時間的な余裕があれば、修正後の解説をチェックしたい。

【事務局】

修正版を後日送付する。

【委員】

掲載されなかった題材を惜しむ声と、今の時代に合っていて良いと評価する声の両方があり、現実にも同じように2通りの意見を聞く。検討委員会としては新しいものができた以上は古いものは使わないという方針だが、今後中学校版の作成に当たっては、そのようなニーズも参考にしたい。

部落問題学習や賤称語指導の実践が不十分だ。人権教育研究の校長会において、来年度の研修では教員に指導していく立場からの研修を考えている。教育委員会としては、教員の指導に当たっての研修をどのように企画しているのか。

【事務局】

「よき日のために」は、今年度6年生の担任教諭を教育センターに集めて研修会を行った。来年度も同様に企画している。

【事務局】

今年度、教育センターでは6年生の担任1名と希望者の悉皆で「よき日のために」の執筆の経緯や活用方法について研修している。その後、同じ講座で希望者を集めて「よき日のために」を使った公開授業を行った。来年度は、1・2年生版を中心とした研修を行う予定だ。賤称語指導については、今後検討していく。

【委員】

賤称語指導を行わないという方針を学校が採った場合、「ぬくもり」を開かれた場所に置きづらくなるのではないか。年度末のアンケートでは、その点の把握は予定されているか。

【事務局】

現時点では考えていなかったが、発言があったので検討したい。

【委員】

調査は継続してやってほしい。教育現場の状況は授業参観からしかわからないが、検討委員として1つ1つの題材がどう受け止められているのか気になる。

部落問題学習及び賤称語指導への活用率が41%というのは高いとは言えない。

自由記述があるので、その内容で判断すれば良いという考え方もあるかもしれないが、アンケートの取り方を工夫して詳細なものにし、題材毎に課題と問題点を明らかにして、蓄積して行くことが重要だ。

今後、第4版の作成を想定すると、時代と共に中身も変えていかなければならない。調査の中身や検討委員会の位置づけも含めて再整理してほしい。

配布数については、アンケートにあるように5クラスに対して1クラス分というのは少ないのではないかと私も感じる。来年度以降、若干でも予算を増額できないか。教職員に対しても十分な配本になっていないということも聞いているので、教員の研修に支障が出ないように工夫してほしい。

【委員】

限られた予算の中での配本だが、実態に合っていないのではないかという意見も受けており検討中だ。

現場意見にはバラツキがあるので、授業論、教材論から考えていかなければならない。

「ぬくもり」を全クラスが活用している姿が望ましいが、学校としては子どもの実態や教員の力量など様々な要因を総合した上で「ぬくもり」のどの部分を取り入れるかを決めていると思う。

旧版の取扱いについては、色々な意見を分析し現場の実態も見ながら検討していく。

【委員長】

廃棄の決断はよかったと思う。我々自身が題材の賞味期限をきちんと見ていくことが必要だ。

【委員】

普遍的な内容の教材は、使い続けてもいいのではないか。

【委員長】

それは構わないと思う。

【委員】

教材を使う教師の力量を高めなければならない。

今の教員の年齢構成を踏まえながら、教員の力量を高める取組に力を入れて、多くの教員に広げていくことが大事だ。

【委員長】

若い教員が多くなっていて知識がない状態だ。

【委員】

校長を始め先輩教員がいかに教えていくかが大事なことだ。自己啓発に任せるだけでは不十分だ。

【委員長】

若い教員が多いときこそ、若い教員に対する研修が重要だ。

【委員】

冊数の件は、先日の市協との個別協議においても厳しく指摘されており、何らかの検討が必要と思っている。

アンケート結果から、全体として評価されていることが漠然とは伝わるが、詳細はわからない。1題材毎に分析する必要がある。

現場の人達がどのように思っているのか、もう少し知りたい。例えば現場の先生にこの場に来てもらうなど、工夫できないか。

【委員長】

自由記述の場合は、評価している意見と批判的な意見はわかるが、興味関心がない層の意見は把握できない。1つ1つ検証しないと、第4版を作成するときに必要な題材を継承できなくなる。

【委員】

1年間での題材ごとの使用頻度を数字で表すなどすることも、いいのではないか。

【委員長】

使っていない教材にはコメントが付かないので良し悪しがわからない。

【委員】

年度末にはその集計を行っている。

【委員長】

現場で実際に使った人の話を直接聞いてみたい。

【委員】

1・2年生用「ぬくもり」も1学年40冊か。1年生1学期から「ぬくもり」を使うかどうかは別だが、低学年の場合は学年で時間割が揃っていることが多い。1クラス分しかないと、本校などは4クラスあるので4回に分けて順に使っていくことになるので使いにくい。一斉授業の場合は該当箇所をモノクロ印刷することになるが、折角詳細に検討された色合い、挿絵、写真の写り具合などが伝わらない。また、低学年の場合は実際に本を手にとった学習をさせたい。学年に2クラス分くらいあれば活用の幅が広がる。

廃棄した旧版について、旧版の中で新版に残らなかった題材は復活することはないのか。

【事務局】

第3版は、初版と第2版の使用頻度を見て高いものを優先的に残しつつ、時代に沿った新しい題材を追加するという考え方で執筆してきた。

今後、学校に対して綿密な使用状況調査を行う予定なので、使用頻度に限らず普遍的な価値という観点も含め、総合的に検討したい。

【委員】

第4版を作成する際は、初版、第2版、第3版全てを検討対象にするということか。

【委員長】

たとえ普遍的な価値を含むものであっても、20～30年前の題材ではリニューアルが必要であり、そのまま復活するという考え方はしない方がよい。失われた価値観をそのまま復活させるのではなく、リニューアルしてその時代の子ども達に合うように作り変えることが必要だ。

【委員長】

「みんなのブランコ」はどのように変わったのか。

【事務局】

いろいろな要素を取り込もうとした結果、道徳の複数の内容項目が混在した資料になってしまった。そこで、内容項目を1本に整理して本文と指導案を全体的に書き直した。

当初、「公正、公平、社会正義」の内容項目として執筆していたが、最終的には低学年の発達段階に合致するよう「友情、信頼」で書き直した。

【委員】

自由記述では、個人的な意見があたかも総意を代表したもののようになってしまうので、アンケートの取り方は工夫が必要。

【委員長】

出てきた意見に対して詳細を掘り下げる二次調査も可能。

ゲームについて言えば、ゲームを推奨するかしらないかではなく、現在はゲーム抜きに子どもたちの文化は考えられない。教育はそういった前提を元に考えなければならないので、その研修も必要になる。

平和学習の教材も、使って良かったという意見が出ているが子ども達が実際にどのように捉えているかはわからないので、授業を見てみたい。良かったと思った人の意見は表に出てくるが、評価しない人の意見はわからないので、アンケート結果だけを見ると勘違いするおそれがある。

【委員】

「ぬくもり」をより活用してもらうためには、かつて市人研が実施していたぬくもり研究集会ができないか。市人研は夏期研究集会を実施しており、実践交流会も校長人権教育研究会との共催で行っている。市人研と連携して、課題や成果がうまく広がっていくようなシステムや研修を工夫してほしい。校長が現場でPRするだけではなかなか広がらないと思う。

【委員長】

若い先生が増え、「ぬくもり」も新しくなった。ベテランの教員が気分を一新して若手教員と共に考え直し、人権教育を大きくリニューアルできるチャンスだ。そうした努力を皆でする必要がある。

3 今後の予定について

4 閉会